

R&V

1992年
夏号 7月～9月
第6号

先輩

ACC-J 東京の水島幸男氏がもうすぐ還暦を迎える。私が入会したのは20才の時、今からン年前である。最初の山行は谷川岳幽の沢V字岩稜右ルート、次は西丹沢中川川悪沢、正月合宿の鹿島槍ヶ岳赤岩尾根と続く。いつも水島さんと一緒だった。そして、いつも楽しかった。八ヶ岳なっとうソースかけ事件、屏風岩合宿の横尾コジキ事件と水島おのろけ事件、赤岩尾根のカレーライス涙ポロポロ事件などなど思い出は数限りがない。私はこんな水島さんが好きである。

新人の頃、水島さんと一緒に屏風岩中央カンテに登った。当然、水島さんがトップである。春山だったがこの日は天気が良く暑かった。水島さんは私が登って行くと、私のために汗だらけのヘルメットに岩からたれている水を溜めておいてくれたのである。私はためらわずそれを飲んだ。水島さんの汗が混じった水はとてもおいしかった。

数年後、屏風岩雲稜ルートを登った。その時は私がトップであった。すでに水島さんは結婚しており子供もいた。水島さんはこう言った。『中央カンテの時は俺がトップだったが、今回はおまえがトップかよ。俺も年だな。』と。でも私は自分がトップで登るのは水島さんがセカンドにいるからであり、私がのぼれない時はいつでもトップを交代できるという安心感があったからである。

最近あまり山に行かなくなってしまったが、水島さんに対する信頼感は今でも残っている。今の私はその頃の水島さんの年令をとうに過ぎてしまったが、私は現在の会員にそんなに信頼されているんだろうかと思うことがある。水島さんの様になら

なくてはと反省すること度々である。水島さんにはこれからも山に登り続けてほしい
と思う今日この頃である。山の先生として。

山のパートナーとして。いつまでも。

(土度助兵衛)



1969年5月カッパ橋にて
左から2番目が水島先輩

目次

(昭和五十八年七月～九月 第六号)

吉野会報

1992年 夏号 7月～9月 第6号 ACC-J茨城

先輩	・・・ 1
集会報告	・・・ 4
山行報告	・・・ 5
阿武隈川南沢右俣	・・・ 6
ウメコバ沢中央岩峰右岩稜	・・・ 8
ウメコバ沢中央岩峰正面右ルート	・・・ 9
松木川ウメコバ沢中央岩峰正面壁直登ルート	・・・ 10
1992 夏 佐藤君の交友録	・・・ 12
谷川岳一の倉沢コップ正面壁緑ルート	・・・ 18
北岳バットレス、ピラミッドフェース～四尾根継	・・・ 20
「おい！小太郎！」のこと	・・・ 22
農鳥ピストン	・・・ 24
御前ヶ遊窟	・・・ 26
利根川 湯桧曾川本谷	・・・ 27
矢祭山	・・・ 28
一の倉沢、変形チムニー	・・・ 29
奥秩父、丹波川本流での体験報告	・・・ 31
北岳バットレス、ピラミッドフェース	・・・ 33
奥只見 片貝沢&貝のくら	・・・ 36
大滝沢から姥湯へ	・・・ 39
多摩川、水根沢	・・・ 42
平ヶ岳、大白沢 シロウ沢～ワカゴイ沢	・・・ 44
巻機山、米子沢	・・・ 48
中央壁『正面フェースルートの思い出』	・・・ 50
編集後記	・・・ 53

集会報告

(於、スカイラーク土浦真鍋店)

大目

7月 8日

出席者 本図、高田、原田、中居、佐藤、村上、庄司、笹沢

7月22日

出席者 鯉河、中島、所、原田、菊地、本図、中居、
佐藤、村上、長久保、高木、古山

8月19日

出席者 本図、鯉河、菊地、高田、生井、佐藤、
中居、長久保、古山、高木

9月 2日

出席者 本図、菊地、鈴木、生井、原田、高田、
高木、佐藤、笹沢、中居、古山、庄司

9月16日

出席者 菊地、中居、原田、長久保、高田、村上、本図、佐藤、高木

9月30日

出席者 本図、所、原田、高田、笹沢、中居、菊地、
長久保、村上、生井、古山、佐藤



山行報告

7月5日	阿武隈川南沢右俣	L本図、原田、中居、村上
7月12日	松木沢ウメコバ中央岩峰右岩稜	L本図、高田、中居、笹沢
7月19日	松木沢ウメコバ中央岩峰右ルート	L佐藤、中居
〃	〃 正面ルート	L高田、本図
7月24日～30日	後立山縦走	佐藤
7月26日	谷川岳一の倉沢コップ正面緑ルート	L高田、中居、本図、原田
8月5日	北岳バットレスピラミッドフェース →4尾根	L佐藤、中居
8月7日	小太郎尾根	L佐藤、村上
8月7日	農鳥岳ピストン	L中居、庄司
8月8日	八本歯→北岳	L佐藤、庄司、長久保
8月8日	4尾根(敗)	L所、村上、中居
8月6日	御前が遊窟ソーケイ新道	L本図、原田
8月15日～16日	湯桧曾川本谷	L所、佐藤
8月16日	矢祭山	L本図、原田
8月18日	谷川岳一の倉沢変形チムニールルート	L中居、他1名
8月23日	奥多摩丹波川本流	L本図、原田
8月25日～26日	北岳バットレス ピラミッドフェース→4尾根	高木、他1名
8月28日～30日	奥只見貝のくら	L本図、原田、他1名
8月30日	吾妻連峰大滝沢	L鈴木、菊地、笹沢
9月6日	奥多摩水根沢	L本図、古山、佐藤、 生井、高田、菊地
9月13日～15日	平が岳大白沢	L本図、原田、所、高田、 古山
9月15日	米子沢	L中居、庄司
9月23日	谷川岳幽の沢中央壁正面ルート	L生井、本図、原田、高田

阿武隈川南沢右俣

92. 7. 5

パーティ L 本図一統、原田真由美、中居康展、村上晴美

協同病院Pに車をとばして定刻に到着したのに、本図さん、原田さん、中居君は、デリカの中で熟睡していた。「なぜなんだー!」と思いつつ、窓をノックして起きていただく。北へ向い、出合近くに車をとめ、小宴会といつものごとく。

仮眠をとって、目が醒めると朝であり、さて出発である。本日は沢登りであるから、濡れてしまうのは覚悟のうえというか、それをして遊びに来ているのだが、最初の川を渡る段で足がすくんで飛べない。

滝はいくつかあった。半年後の今、思い出せるのは、本図さんが直登するのをやめた滝がひとつあったのと、本図さん自身は水に濡れないように登ったのに、カメラを構えながら、「原田さんと村上さんはこっちに登らなきゃだめだっぺ」といっていた



大滝を登る 中居

ことと、昼食後に、あとは沢をだらだらつめてやぶこぎだと思っていたのに、日本庭園にあるような滝があらわれたこと、沢の水がなくなったあとに、ぼろぼろに風化したスラブがずっと続き、足を滑らせて痛かったこと、そして、そのスラブを避けるためにやぶに入り本図さんについていったのだが、猿（ましら）の様な本図氏にとってもついていけなかったこと、ぐらいである。

いやまてよ、昼食のことを忘れておりました。この日も登る道すがら、いろいろな山菜を収穫して、もちろん山菜のてんぷらを「もうたくさんだ」というほど食したのであった。また、沢の水で冷やした冷し中華もおつなものであった。残念なのは、イワナの刺身が食べられなかったことであろうか。

沢登りは楽しいのだが、私の頭はニワトリに近いのであろうか、どんな滝があつて、どんな風に登ったのか、すぐ忘れてしまうのである。今年の夏の沢登りの際には、滝の写真を必ず撮っておこうと心に誓った私である。

甲子温泉 P 6 : 15 - 出合

6 : 55 - 二俣 10 : 30

(昼食) 11 : 40 -

甲子山頂上 12 : 30 ~

13 : 00 - 甲子温泉 P

14 : 00

(村上 記)



甲子山頂にて 中居、本図
村上、原田

ウメコバ沢中央岩峰右岩稜

92. 7. 12

パーティ L 本図一統、高田暢年、中居康展、笹沢ひろみ

今回の山行は不安、緊張の他に、日本のグランドキャニオンといわれるほどの景色に対する期待、鉱毒事件の悲しい歴史への重さなどさまざまな思いを胸に出発。途中、林道では胃袋がシェイクされ悲惨だったが闇夜に照らされたシカに感動！翌朝への期待はふくれる。到着後、偶然水戸葵山岳会の御2人と合流、本図さんのデリカで計6人、アルコールにて睡眠導入。

朝になりまずまず快晴。

バーンと地肌をみせる山々。
眼がくづけになる。ラッキーなことに1時間のアプローチもない。ウメコバ沢にすぐ近い所で車を止め出発。私だけがハーネスをつけ、ウメコバ沢の最初の滝を本図さんに確保してもらい登る。高田さんと中居くんは行ってしまった。なさけない・・・トホホ。いよいよ谷はV字型になり恐ろしいほどの岩峰があらわれる。ほんとに草や木が生えてない。枯れた大木が事件の悲惨さを残し、いつ落石がおきてもおかしくないようだ。ハゲタカが飛んできて死体でもつまんでいそうな・・・まさに子供の頃テレビで見たことがある異国の恐



核心部を登る笹沢

く、もの悲しい風景だ。

いよいよ登攀開始。中居くんがトップ。フレンズ、ナッツなど研究しながら登っていく。私はセカンドだ。岩は乾き、おちたらザイルが切れそうなくらい鋭い。フラットソールが岩に吸いつくという表現が少し納得できるような快適な登りだ。心残りは1カ所、どうしてもスタンスがみつからなくて本図さんの肩をおかりしたこと・・・ゴメンナサイ！7ピッチぐらいで終了、葵のパーティと合流。1回の懸垂とガレ場をくだり取り付け点に到着。昼食のあと近くのゲレンデで練習。私もどうにか登ることができた。今回も私の期待をうらぎることのない山行だった。大満足！

(笹沢 記)

ウメコバ沢中央岩峰正面右ルート

92. 7. 19

パーティ L 佐藤文則、中居康展

中居さんとパーティーを組んだことは、ワングル時代にはなかったことで、今、こうして普通に組んでいるのが不思議でもある。

どうも朝一のトップはいやなので、中居さんに行ってもらおう。なんとなくおぼつかないが、何とか登れたので、2P目はトップをやる。やはり、緊張の度合いが違う。不確実なホールドに手を、足を預け、上を目指す。ウメコバ沢は残置ハーケンが少なくより一層緊張する。それでも、2P、3Pと無事に登るが、4P目、僕のトップの時、これは苦勞した。何と言っても本当に細かいホールドしかなく、そのうえやっぱりハーケンがないのである。しかもややかぶり気味なのである。う〜ん仕方が無いからA0を使う。一手だけシュリングをつかみ体を大きく外に振り出し、やっとの思いでホールドをつかんだ。その後も難しいながらもやっとかさで4Pを終わり、トップを交代。2ndは・やっぱり楽だとちんたら行くと、全然甘くない所に出てしまった。精神統一してのっこせば、後はやっぱりらくちんだった。

コースタイム

車 6:30 - 取り付け 7:00 - 登攀開始 7:30 - 終了 10:30

- 取り付け 12:00

(佐藤 記)

松木川ウメコバ沢中央岩峰正面壁直登ルート

92. 7. 19

パーティ L 高田暢年、本図一統

先週に続き今週も又ウメコバ沢中央岩峰にやって来た、この時期二週続けてウメコバに入るのは珍しい。どちらかと言えば、ここはシーズンオフの頃来ることが多い。ぼちぼちここも登る所が無くなってきた。今週は私と本図さんで中央岩峰正面壁直登ルート、中居と佐藤で中央岩峰右ルートを登る。

前夜いつものように下館に集まり本図さんの車（川上風に言うと社長のハコ）でゲートの所まで行き、お約束の一杯をやり寝る。ウメコバは朝がゆっくりであり、更に車がゲートより先に入れば、中央岩峰の取りつきまで一時間もかからないから嬉しい。（しかし一度でも台風が来ればすぐに通れなくなってしまう）

私がここに初めて来た頃に比べると少しは緑が見えるようになってはきたが、相変わらず陰惨なイメージを拭い切れない景色である。此処の沢の水で風呂を沸かし、飯



リードする高田

を炊き一年間生活すれば、必ず体に異変が生じるだろうなと思いながら中央岩峰正面壁直登ルートの取りつきを目指す。登攀具を付けトップの私は空荷で、本図さんは水と行動食を背負い取りつく。取りつきは少しヤブに隠れているが、岩に白ペイントでJ M C C直登ルートと書いてあるのですぐにわかる。

中央岩峰は他に比べると岩は硬く快適ではあるが、残置ハーケンは全く信用出来ない、抜けるとか抜けないとかという問題では無く根元から腐って痩せ細っている。グレード的には難しく無くても途中ランニングがあまり取れないので緊張する、2ピッチ目はルート図によると人工で登るような事が書いてあり、頭上を見上げるとボルトが連打してあったのでそれを目指しやや左上ぎみに登るがこれが間違いであった、ボルトに辿り着く前にいきずまってしまった、一度落ちるがフレンズに助けられことなきをえたが、左手をやすりの様な岩肌につけすりむいてしまった。残置シュリングを使い何とか登るが、その後本図さんが登ってきて私がいきずまった所の下まできてルートを熟視したあと私の方には来ずに直上してしまった。確かにそっちの方が簡単そうであった。後で本図さんに「ボルトの方が正規ルートじゃないんですか?」と聞くと、さも俺とお前とではルートファインディングの年季が違うと言わんばかりに、



最終ピッチを登る本図

人指し指で自分の目を指しながら「此処のちがいのよ」と得意げな笑みを浮かべていた。

その後は順調に登る、所々に白ペイントの目印がある、こんな所はゲレンデと言う雰囲気強い。終了点の頭の手前で右ルートの人と合流する。終了点の頭でザイルを解き行動食を食べる。

落石に注意しながら途中懸垂一本を含むいつものルートを下る。中央岩峰左岩壁の下を通る時、本図さんが次はこっちだなと見上げていた。私も見上げながら次はセカンドでいいやと思った。（どうも最近年を取ったせいか、はたまた利口になったのかトップよりセカンドの方がいいと思うようになってきた）佐藤君、中居君次はよろしくね！

（高田 記）

1992 夏 佐藤君の交友録

92. 7. 23～30

パーティ 佐藤文則（単独）

今年で学生生活も最後である。山を初めて4年になる。何か集大成と言うか思い出に残ることがしたい。しかし、単独で岩を攀る自信も、実力もまだない。でも、一人で何かをしたい。一人でも自信を持って出来ること、それをやり通して見たい。それだったらやっぱり単独縦走しかないだろう。それならできれば人の少ない所がいい。ついでにあまり行けない所がいい。そして、できるならちょっと有名で、登った事の無い所がいい。おまけに、縦走では、難しい（危険もある）とされている所がいい。などなど欲張りな事を考えて、思い浮かんだのが、朝日・飯豊連峰、南アルプス（一部）、北海道；大雪山系、日高山系等である。そんな中から実際の目的地としたのは、前々から行ってみたいと思っていた針ノ木岳、檜が岳、大キレット、湊沢岳、そしていつもの横尾～上高地への道があり、しかも余力があれば、西穂～焼岳までも足をのぼせる、扇沢～種池～針ノ木峠～蓮華岳～裏銀座～檜が岳～奥穂高岳～湊沢～上高地へのコースを選んだ。

7月23日

久しぶりに電車で山に行く。本当に久しぶりだ。でかいザックを背負い、山靴を手にもち、Tシャツにジャージにサンダル履き。山に行く実感がわく。やはり“旅”には電車が気分である。中央本線の立川駅で寄り道をする。立川からは16時01分発の鈍行に乗る。ところが、人身事故だとかで電車が来ないのである。幸先の悪い。他の電車よりも優先して松本行きがくる。予想以上の混雑の中、電車は予定を少し遅れて発車した。仕事中の人、下校途中の高校生、その他大勢の中ザックを抱える様にして座る。混雑した車内で丸くなって寝る。気がつく、いつのまにかすいていて、漫画を読んだり、うとうとしたりして過ごす。20時ちょっと前に松本についた。コンビニに行ってお弁当を2食分買い、一つを食べ、一つを朝飯にとっておく。21時02分松本発の電車で信濃大町へ向かう。最近では、車で寝ることが多かったが、これまた久しぶりに駅前の公園で寝る。街灯の明かりにてらされてベンチの上で寝る。ちょっと緊張しながらも寝る。

7月24日

人のざわめきで目が覚めた。まだ5時半なのに、タクシーの前に人が並んでいる。おそらく夜行でついた人達だろう。駅前の臨時の派出所に行き登山届けを出す。タクシー乗り場で相乗りする人を見つけてあわててタクシーに乗る。扇沢で朝飯を食い、歩きだす。15分歩いて登山口に着いたとき、かかところが痛いので靴を脱いでみると靴のかかところが破れている。ここでテーピングテープを貼り再出発。山菜採りのおじさんと少しだけ一緒に歩いて別れる。2年前アルバイトの途中で営林署の課長さんと、小屋のおやじさんと、もう一人のアルバイトと下ったのを思い出す。楽に下りた気がしたのだが、登りはとつてもとつてもきつくてバテバテになって種池小屋につく。10時55分。小屋でおやじさんにお茶をごちそうになって、昼飯を食い、アルバイトの人と話をしたりして過ごす。爺々ヶ岳に行くのがだんだんおっくうになり、テントで昼寝した。10人ぐらいの大学生らしいパーティーがいたので、話をしてみると信州大学のパーティーだった。そのなかの一人がやはり4年生で、岩もやるらしく、又僕と同じように社会人の山岳会に入っているそうで話が弾み、晩飯の後にも飲みながら話をした。

7月25日

山中一泊目の朝、快晴である。他のパーティーはまだ寝ていたが縦走時の習慣で早出する。途中剣や、立山、鹿島槍、唐松岳等の山々がよく見え、すんごい気持ちいい

なか歩く。今日は5個のピークに立つ予定である。最近ではあまり買わないが、山のバッヂを集めるのが大好きな僕はわくわくしてしまう。小さなピークもいれてだからバッヂはそんなに増えないが幾つ集まるか楽しみである。そんなことを考えながら最後のピークである針ノ木岳につく。まだ昼を過ぎたばかりだが、もう動かない。ゆっくりと昼飯を食いながら、いろんな人と話をする。50近いおばさんや、ゆっくり歩くおじいさん、やはり中高年の人が多い。話をしているうちに写真大好きのおじさんと話が合い一緒に下山する。針の木峠でテントを張った後おじさんと一杯。一気に飲んだせいかやたらとまわり1時間ほどで切り上げテントで昼寝。夕方起きて、晩飯を食って水を買に行ったらおじさんもちょうど外にいて又一杯。ハア〜アくらくら。

7月26日

今日もまた長い行程が、待っている。まずは蓮華岳に登る。傾斜のない、ノッペリとした頂上にたつ。これから行く北葛岳への長い下りと、長い登りとが続いている。ヤンナッチャウナー、もう。一番で下り始める。ヒューッてな感じで高度を下げる。あーもったいない。コルに下り登り返す。縦走で一番辛く感じる時間である。一人とすれ違っただけで北葛岳についた。行動食を食べ、大休止をして船窪へ向かう。七倉岳では写真を撮って通過し、船窪の小屋へ向かう。小屋は、小さくて小ざれいな感じ



蓮華岳にて

のよさそうなところだった。昼前だったが、早々に昼寝を決めこむ。なんといっても明日は、メインイベントの第一の箇所なんだから。

7月27日

緊張の朝である。難所として有名な所へ今から向かうのだ。昨日一緒に飲んだ下関市立大の下級生たちはやたらとこわがっていた。俺だって怖いと思いながらも、憧れのルートでもある。気を引き締めて出発する。やや荒れた船窪岳へのアップダウンを行く。小ピークを2つも越えた後だろうか、また小ピークだと思ったら、今度は船窪岳だ。2メートル位の木に囲まれた中にある、なんとも不思議な感じのするピークである。さらに気を入れて先へと向かう。何方所か切れ落ちている所を歩くも、道は全体的に黒部側に付けられており、思ったより楽に不動沢岳につく。これからは楽だと思ったのは大間違いで、南沢岳への登りでばてばてになり、やっとの思いでエボシ岳に登り小屋へとむかった。エボシのテン場で、昨日船窪で一緒だった単独の人と話をした。横浜の方の地球倶楽部というクラブの人で、ケービングをやっているということだった。

7月28日

昨日エボシ岳の手前で追い越された連足のおじさんと野口五郎岳をすぎた辺りで出会った後は、裏銀座のプロムナードにふさわしいゆるやかな、そして沢山の山々を見の上に立つような登山道に行く。水晶の小屋で、黒岳に行こうかどうか迷ったが、天気が悪くなりそうなので三俣へ向かう。折角なので鷲羽岳だけは登ることにする。まだ天気はいいので頂上でゆっくりとする。またもや12時過ぎに小屋に着くがテントを張る。ここには黒部川の源流があるということなのでいってみる。途中でタイガースのメットをザックに付けた人とすれちがう。トラきちっていうのはどこにでもおんねんなおもいつつ先へ下った。源流部というのはただ、石碑が建っているだけでたいへんつまらなかった。雨が降りそうになってきたので急いだが、テントに着く前に降られた。後はおとなしくしているだけだ、テントが狭いぜ。

7月29日

今日も快晴。日頃の行いがいいと、こうも神様に味方してもらえるなんて、僕はなんて幸せなんだろう。今日も一日(僕の行動中)いい天気でありますように。先ずは昨日の続きのようにゆっくりと三俣、双六と登る。さてさてここからが長いんだ。東鎌尾根を経て檜ヶ岳まで、アア遙かなたにそびえている。もうなにも言うことはない。ただひたすら歩くのみ。途中、じいちゃんばあちゃんや、小学生御一行様を含め

じつに多くの人と行き違った。流石は“裏銀座”である。槍の穂へは、人の少ないときをねらって取り付く。それでも、渋滞につかまりハシゴや岩にへばりついたりしながら登る。さて、またもや昼前に目的地についたのだが、今日はどうしよう？天気はよさそうだし、明日、一番で大キレットを越すほうがいいだろう、よしっ、行こう。



大バミ岳にて

中岳で昨日のトラきちさんと一緒になり、少し話をして、先に行く。飯を食った後小屋にビールを買いに行くと、案の定飲んでいたので一緒に飲む。

7月30日 またまた緊張の朝である。あの、大キレットを歩くのだ。人一倍怖がりの僕だけど平気かな、などと考えながらも3時間で通過。ちょっと怖かったかな。北穂の頂上で一休みしていると、雲がわいてきた。山岳警備隊の人でも天気は悪くなりそうだという。うーんどうしよう。ま、後で考えよう。まだまだ緊張しながら涸沢岳を目指す。穂高周辺ではここだけ来たことがなく、実は涸沢岳が最終目的地だったのである。ここまできると、どっと疲れもで、緊張もなくなってしまった。よしっ下りよう。最終のバスには間に合うだろう。後は、ただひたすら歩きまくって、徳沢の手前で一緒になった人にバスの時間を聞き、上高地にたどり着く。ああ長かった一週間も終わり、4日からは合宿だ。

最後までお読み頂いた皆様、お疲れ様でした。プライベートな日記のようなものになってしまってますみませんでした。

コースタイム

7月24日 6:00 扇沢 - 10:55 種池小屋

7月25日 5:00 種池小屋 - 11:00 ズバリ岳 - 12:15 針ノ木岳 - 13:30 針ノ木峠

7月26日 4:55 針ノ木峠 - 6:00 蓮華岳 - 10:40 船窪小屋 - 11:40 テント場

7月27日 4:50 船窪テント場 - 6:45 船窪岳 - 9:30 不動沢岳 -

12:30 烏帽子岳 - 13:35 烏帽子小屋

7月28日 4:30 烏帽子小屋 - 7:20 野口五郎岳 - 12:30 三俣山荘

7月29日 4:30 三俣山荘 - 5:15 三俣蓮華岳 - 12:15 槍ヶ岳 - 15:30 南岳小屋

7月30日 5:15 南岳小屋 - 8:15 北ホ小屋 - 10:20 瀬沢岳 - 12:10 瀬沢 -

17:25 上高地 - 松本

P S. 松本では、一人で祝杯でした。

(佐藤 記)



図本るすイーリーとくハ

谷川岳一の倉沢コップ正面壁緑ルート

92. 7. 26

パーティ L 高田暢年、中居康展、原田真由美、本図一統

昨年6月、私と原田嬢はコップ左岩壁に取り付いた。しかし、原田嬢はオーバーハングが乗り越せず、やむなく敗退した。コップスラブを下っている時の、あの原田嬢の顔が今でも忘れられない。無事に降りられたという安堵感と残念そうな、そしてくやしいという気持ちが複雑に入り混じっている様な顔であった。

今日は、その雪辱戦でもある。原田嬢も、この一年間人工登攀の練習を充分にやってきた。よし、今日はコップ正面壁と左岩壁の継続登攀をしよう。ザイルオーダーは本図、原田、高田、中居の2パーティ。コップ広場で登攀準備をしていると、もう凹状岩壁の終了点に人が見える。早いなあと見てみると、どうやらコップの方に降りてくるらしい。彼らも継続登攀のようだ。

緑ルートに取り付く。私はこのルートを登るのは3回目だが、以前と少しルートが違ったような気がする。カール下テラスまで40mいっばい。すぐ原田嬢を上げる。彼女も今日は調子が良いようだ。これなら今日は左岩壁もいただきだな。懸垂で取り付きまで降り、登攀中の高田に声をかけ左岩壁に向かう。左岩壁も私は3回目である。以



ハングをリードする本図

前、木村氏とみぞれの降る中を震えながら登ったことを思い出す。さて1ピッチを登りセルフビレー。『原田さん登ってきていいぞー』と言おうと思った時、高田が落ちた。すぐさま降り高田の所に行く。ボルトが抜けランニング用のハーケンも2枚抜けている。30mの転落であるが幸いなことに空中を飛んだので、ヘルメットにヒビが入っているもののたいした負傷ではなかった。高田の様子から登攀続行は無理と判断、皆に下山を告げる。下山途中の高田の顔は一年前の原田嬢の顔と同じであった。長い間、岩登りをやっていると、こういう事は経験することであり、とにかく無事で良かった。原田嬢に申し訳ないが今回も左岩壁は登れなかった。ゴメン。

(本図 記)



北岳バットレス、ピラミッドフェース～四尾根継続

92. 8. 5

パーティ L 佐藤文則、中居康展

8月3日

今回の夏合宿は北岳バットレスということで、夜8時に協同病院に集合した。鈴木さん笹沢さん、佐藤君そして自分の計四人に登攀用具やテント一式等々を積み込むとパジェロはいっぱいである。翌日の天気は雨のようであるがうまくすれば明後日には回復するかもしれない。期待しつつ雨の中央道を走った。

8月4日

1時過ぎに広河原に到着。駐車場は平日ということもあって比較的空いている。朝目覚めると、雨はやんでいるものの山には霧が深く立ちこめている。今日は白根御池小屋までの移動だけなのでのんびりしたものである。7時広河原発。昼過ぎに小屋に到着する。雨らしい雨は降らず、どうやら天気は回復の傾向にあるようだ。テント設営後、佐藤君と二人で取付きまで偵察に行く。霧が深く良く見えないが、バットレスの取付きまではかなり登らねばならないようだ。明日登るピラミッドフェースを確認してテント場に戻る。



ピラミッドフェース取付きにて

8月5日

3時過ぎに起床。餅ラーメンの朝食を済ませて出発する。4時半。北岳の頂上はガスに隠れるものの良く晴れている。絶好の登攀日和だ。

今日のパーティ構成は、佐藤、中居でピラミッドフェース～四尾根、時間があれば中央稜に継続、そして鈴木、笹沢で四尾根を登るということになっている。もっとも笹沢さんの仕事の都合もあって、天気が悪くなるようであつたら無理せず下山ということだった。ピラミッドフェースの手前で鈴木さんたちと別れる。6時半に取付き。7時前、さて登攀である。最初のピッチは3級+のはずであるがやたら難しく、4級+～5級位に感じた。ひょっとして間違つたかななどと思ったが、左上バンドに出て目立つハング下のバンドを見つけるとルートはハッキリしたものだ。ガスが時々かかって視界はきかない。たまにパラパラと小雨がちらつくが岩がびしょびしょに濡れる程でもなく、十分快適である。でもこう視界がきかなくては登っていてもいまいち楽しくない。最初は霧が晴れることもあったのだがそのうち霧雨のようになってきて、最後の核心部5級は濡れてなかなか厳しかった。ハング下を右にトラバースして4尾根に合流した。この時はもうすっかり雨といった感じでけっこう気分的にも減入ってしまう登攀であつたが、自分はまだ四尾根を登ってないこともあって佐藤君を説得し、登攀を再開した。四尾根自体は難しくないので、全身ずぶ濡れで視界0となつては面白くもなんともない。2時40分頃だったか、登攀終了。3時に北岳山頂に着く。計16ピッチ。草すべりを下って5時頃にテントに着く。途中で視界がきかなくなった時点で鈴木さんたちは下山しただろうと思っていたら案の定であつた。

翌日はどピーカンであつたにもかかわらず登る気力が無く停滞にしてしまった。結局今回の合宿で登つたのはこの1本だけになってしまった。まあいずれの機会にでも下部～上部フランケ～中央稜、もしくはdガリー奥壁を登るとしよう。

(中居 記)



「おい！小太郎！」のこと

92. 8. 7

パーティ L 佐藤文則、村上晴美

白根御池の天幕場を出発し、草スベリの急登をゆっくりと登っていく。佐藤君は「訓練だ。」といって、私に荷物を背負わせてくれる。嬉しいことだ。樹林帯の中はとても暑い。左手に見えていた雪渓も見えなくなり、（この雪渓は、我々のビールを冷やしている冷蔵庫である）ただひたすらに右足と左足を交互に上げる。

昨日は、広河原から大樺沢を登り、白根御池の天幕場に到着したのだ。連日の不摂生と運動不足で、バテるどころの騒ぎではなく、半分死んだ様になってしまった。広河原で、上に持ち上げる荷物を並べてみたら、2人分のザックに「本当にこんなにはいるのか？」と考え込むほどの量があつて、登る前からうんざりしてしまつたが、この日のパートナーは、シェルパ庄司との異名をもつその人だったので、食料はほとんど庄司君が背負つたのだが、ものすごかった。やはりシェルパ庄司だ。その庄司君と中居君は、白根御池↔北岳↔間ノ岳↔農鳥岳ピストンを志し、出発していった。果して彼らは、今日中にテントまで帰ってこられるのだろうか。

などと人の事を心配している場合ではない。途中で休憩したところで、かなり疲れている私をみかねてか、佐藤君がザックを交代して背負ってくれるという。本当にありがとうございます、佐藤君。草スベリがやっと終わり、いっきに目の前が開ける。これがあの北岳のお花畑か！あまりしみじみと花の美しさを観賞する余裕はなかったが、吹き抜ける風が心地よい。お花畑の中のガレた道を登って行くと、小太郎尾根に出た。

今日の予定は、小太郎山と北岳のピークを踏むことである。小太郎山（2725.1m）は標高をみると高いのであるが、縦走路の途中でもなく、また、北岳・間ノ岳・農鳥岳と更に高い山が向こう側にあるので、あまり登られていないようである。昨日4人で「これはなかなか渋い山だぜ。たぶん本図さんだつて登ったことないよ」と話し合つて、本日の行動となつた。合言葉は、ゲゲゲの鬼太郎の目玉の親父さんの口調で「おい！小太郎！」である。

さて、尾根で少し休憩をとり、富士山をバックに写真をとったりするが、風がなかなか強く、寒くなってきたので雨具を着て出発する。小太郎山に向かうのは、これだけの人がいるのに、佐藤君と私の2人だけである。雨具を着ていてもかなり寒い。

踏み跡をたどり、また、岩の積み重なりを越えたりして、歩いていく。途中でハイマツのやぶをくぐり抜け、小太郎山に到着。

北に甲斐駒、西に仙丈、東に鳳凰三山、そして南に北岳という素晴らしい眺めである。そして、小太郎山の裾野をとりまくように、野呂川の流れがあり、またあのスーパー林道もしっかりと見ることができる。素晴らしい景色を楽しんでいると、やぶからガサガサと人が登ってきた。この人は一人で扇沢の沢登りをしてきたということである。この人に、2人で写真を撮ってもらったりして遊んだあと、今度は北岳に向かって出発である。先ほどたどってきた小太郎尾根を戻り、肩の小屋を過ぎ、日本第2番目の高峰、北岳(3192.4m)のピークを踏む。間ノ岳・農鳥岳もよく眺められる。佐藤君が、農鳥ピストントライアスロン部隊との定時交信をしている間、「明日は、バットレスを登攀して、このピークに出てくるのか」と思いつつ、お昼寝をしていた。帰路は、草スベリの樹林帯に入ったところで、雨がパラついてきた。

さて、この日の行動はこれで終了したのだが、次の日のバットレスは、結局取付きが発見できず、ちょうど雨も降り始めたため敗退したのであった。登れないとなると、残念なものである。そうそう、この日は落石の恐怖に何度も脅かされた日でも



小太郎山にて

あった。人命救助もしたと言えよう。翌日下山の予定であったが、台風接近との予報であったので、テントをたたみ1日早く下山をし、我々の冷蔵庫セブン・イレブンの駐車場に車をとめて、なんでもありの大宴会を台風通過の中で行ったりしたのであった。

小太郎山はよい山であった。また機会があれば逍遥してみたい山である。

(村上 記)

農鳥ピストン

92. 8. 5~9

パーティ L 中居康展、庄司真陸

夏合宿... もう半年前だ。すでに冬合宿を終えた今、腐乱した記憶からそのことを文章に仕上げるのはねつ造犯罪の気配さえ感じる。しかし本図サンから恐怖の催促電話がくるまでにはなんとしても書き上げなくては。

8/5夜、最大の山場はいきなり始まった。私が恐れおののいていた首都高に入る。なにしろ、高速にのるのが人生初なのだ。料金所で券をスムーズにとり、お金を払いオツリをもらい、間断なく走っている中を車線変更しなければならない。私に無事こなすことができるか、不安は尽きない。「起きて起きて！」と村上サンを情け容赦無く起こす。そう、この先村上サンだけが頼りだ。

発煙筒が前方に姿をあらわす。どうしてよいかわからず、ためらいながら進むと、「はやく車線変更しろ！」村上サンが慌てて叫ぶ。あとで、あれは前方事故のマークだからね、と教えてもらおう。やはり村上サンは頼りになるなあ。道中、パートナーを散々おびえさせたが、何とか夜明けとともに広河原着、仮眠。

8時過ぎに出発。村上サンは針金のような軀で荷を背負い登る。えらい！

予定通りに、御池小屋で順調に筑波大コンビと出会う。中居サンは持ち込んだ参考書で勉強、佐藤サンは優雅に昼寝、まわりの果てしなくノドかな風景とも相まって緊張感ゼロだ。直前まで日高で気ぜわしい旅をしていたので、こういうのは心が休まりよい。ところが、中居サンが夏の日高縦走の経験を話してくれたのでぶったまげた。

なんとすごい。一気に尊敬の念が高まる。中居サンがラッセルマシーンと呼ばれているのを知っていたが、同時にこのひとはヤブコギマシーンでもあったのだ。ああ、俺もいつか日高縦走やりたいなあ。

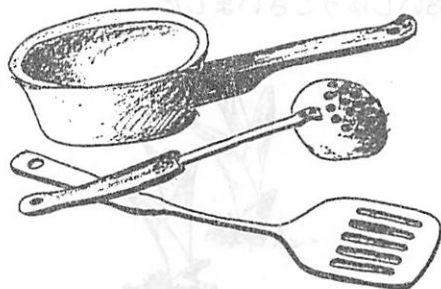
8/7、5時出発。パートナーはマシーンマン中居サン、行先は農鳥岳、1日ピストンをめざす。自然、荷はほとんど空になる。北岳までの草すべりの登りはさっそく渋滞だ。バテているのはほとんどの場合、ワングル君だ。パンパンになったキスリングに大ナベや特大フライパンをくくりつけ、ふらふら登る20人くらいの姿に「こんなやつ、まだいたのか!」とおどろき、また、かつての自分を思い出す。しかし、鈍い体の動きとは逆に、彼らはかけ声だけはうるさいくらいにイセイがよい。中居サンと「絶対にあいつら、頂上で万歳するぞ。」と予想していたら、期待を裏切らず、無邪気にやってくれたのでたいへんよかった。

中白根、間の岳、と2人とも元気だ。間の岳は立派でよかった。その後も快調に進み、農鳥岳で昼食。フランスパンにハム、チーズ、きゅうりを挟む。天気もよく、昼寝でもしたい気分だ。だが、そんなに休むことはできない。ここまでだってほとんど休みなしでやってきたのに、すでに結構な時間なのだ。調子よく歩いてこんな状態なのだから、今日のコースがかなり長いことを今更ながら思い知らされる。

帰路は単調だ。時間の経過が往路より長く感じる。そして天候が怪しい。雨具を来たり脱いだり、しかし間の岳を過ぎるころから本降りになってきた。イヤな気分にならないよう2人で喋りながら下る。途中、北岳山荘からは北岳にはよらず、八本歯のコルから雪溪を降りる。疲れと慣れない雪溪に戸惑うが、さすがに中居サンは強い! ニコニコしながら下降の注意を教えてくれる。

PM 4時ごろ御池小屋着。いいかげん、もう歩くのはうんざりだった。コースタイムをみると所用時間16時間とのこと、どおりでなかなかつかないはずだよ!

(庄司 記)



御前ヶ遊窟

92. 8. 6

パーティ L 本図一統、原田真由美

この山は本図さんの取材山行の道づれにされたものです。くわしく山の情報が知りたい方は「岳人10月号」を見て下さい。本図さんの執筆されたガイドが載っております。私の姿もしっかり写ってます。

きっかけはある山行での道中、本図一統さんの訴えかけるようなひとり言からでした。「岳人から電話があつて、御前ヶ遊窟のソウケイ新道の原稿を依頼されたんだけど一回行ってみないと書けないんだよ。誰か一緒に行くやつはいないかな。」つと・・・以前、当会員の大勢が御前ヶ遊窟のしじみ沢に行った時に、私は仕事の都合で行くことが出来ませんでした。そこで簡単に「私が行きます。」と立候補してしまつたのです。あとで考えてみれば、この時期に登る山ではないのです。標高が低いのですから、汗をかきに登るのは目に見えていたのです。

当日は朝から晴天。ラーメンをすすりながらも汗が吹き出しそうでした。凝り性の本図さんは、いつも山に持ち歩くバカチョンカメラを持たずに、当日はピント合わせが面倒そうなカメラを肩にかけて意気揚々としていました。登りの途中では、”何でこんな物を写すの”と思うような物まで、立ち止まりカメラを向けていました。しかし、汗でボロボロになった私にはよい休憩時間になりました。ただ時々、被写体となるために「はい止まって・・・はい少し戻って・・・はい歩いてみて・・・。」と指示され、モデルのように行動する自分自身にバカらしさを感じたのも事実です。本図さんは下山後も、汗だくになって地元の役所に立ち寄り、何やら調べておりましたが、その間私は冷房の効いた車内にいました。

感想は、とっても暑い一日でしたが、帰りにごちそうになった100円のアイスクリームが、とってもおいしかったです。

(原田 記)



利根川 湯桧曾川本谷

92. 8. 15~16

パーティ L 所繁、佐藤文則

このお盆の時期なぜか仕事が入っていてなかなか休めない。しかし、今年に限って、金、土、日と空いていたのでどこでもよいから沢に入りたい気持ちが強く、集会で佐藤がつき合ってくれるというので、きっと楽しい沢登りが出来ると夢見た。場所は、近くて良い沢そして1泊2日、すぐに決定する。湯桧曾川本谷。

土合の駅から何度となく通った道も、湯桧曾川に沿った道を歩くのは初めてで、地図をたよりに歩く。武能沢出合いで二パーティが先行する。我々もここで身じたくを整え本谷へと下降する。

川原は、明るく、豊富な水量と緑がやけに美しい。3段大ナメから十字峽を過ぎると、いっそうナメ滝と釜が連続し楽しい登攀を約束してくれる。途中、10メートルの垂直の滝を右側から斜上して、いくつかの滝を越えていくと、この沢最大の40メートルの大滝が現れる。見事である。思ったほどではなく、左側の壁の上部でビレーする。

ここを越えると、峠の沢の出合いとなり、清水峠が間近に見える。我々は、穏やかになった川原を歩き二俣で大休止する。でも時間は、ビバークするには早すぎるため行けるところまでと心に決め歩きだす。ところが、なかなか二俣から上は適当なビバークサイトがないため、ついつい歩いてしまい、朝日岳直下の稜線上でビバークする。なまぬるいビールではあったがとても美味しく夕暮れまで話し込む。

二日目。ツェルトを開けると外は雲海になっており、冷たい空気がまた何ともいい。軽い食事をし朝日岳山頂へ。白毛門からの下りが非常に長く感じられ、サウナに長時間入っているようだ。何回か小休止をとり、やっとのことでヒュッテ下の東黒沢につき、さっそく水風呂につかった。2日間の山行を振り返ると、やっぱり沢登りは楽しい。パートナーに感謝。

(所 記)



矢祭山

92. 8. 16

パーティ L 本図一統、原田真由美

お盆の最終日、原田さんと矢祭山に行く。前日夜、矢祭山駅近くの広場に車を止める。ゲレンデなので早起きする必要もないので、ゆっくりビールでも飲むことにする。今回はいつもより酒の量を多く持ってきてある。私も原田さんも、いつものペースで飲みはじめる。山の話、仕事の話、人生の話など波長が合う人とは話もはずむ。ここで私は大失敗をしてしまった。いつも酒代は割カンなのだが、調子に乗り過ぎて『今日のビールは俺がおごるよ』と言ってしまったからもう大変。それからあわてて口を押さえても後の祭だった。原田さんの飲むペースが急に上がり、グビグビ、いやドクドク、いやガブガブといった方が正しい。俺がバカだった。彼女は、ただ酒だとわかると、いつもこうだと知っていながら、つい口をすべらしてしまった俺が悪いのだ。こうなったら少しでもと思い、わからないように缶ビールを3本隠すことに成功した。でも最終的には持ってきたビールのほとんどを原田さんが飲んでしまう結果となった。国道はお盆のせいか交通量が多く、一晩中エンジン音がうるさくて眠れなかった。

翌朝、ラーメンを食べてゲレンデに向かう。すでに太陽はかんかん照り、暑くて暑くてどうしようもない。フェース、ナイフエッジと4〜5ピッチを登る。汗は滝の様に流れるも、もう一本隣の岩峰に登ろうと提案するが、原田さんはいやだとガンと言うことを聞かない。酒はガンガン飲むし、岩登りはやる気が無いし、なんとも悪いパートナーと来てしまったもんだ。しかたないので降り始めると『キャー』と原田さんの悲鳴。見ると大きなマムシがいた。私が棒で払いのけようとする『ヤメテ』と言いながら私を押すのである。引くならともかく押すのである。まるでマムシにかみつかれるといわんばかりである。これで私の心は決まった。もうこのパートナーとは二度と山には来ないと・・・。

追伸

帰路、アユのヤナ場があった。原田さんはアユを食べたことが無いという。私は何回か食べたことがあるので食いたくもなかったが、付き合うことにした。私は塩焼き

を食べたが、原田さんは刺身、その他いろいろ食べている様であった。私だってそんなにバカではない、自分の食べた分は自分で払うことにしたのはいうまでもない。何という山行報告でしょうか、申し訳ありません。

(本図 記)



一の倉沢、変形チムニー

92. 8. 18

パーティ L 中居康展、中川智（筑波大学WV、OB）

今回のパートナーである中川は、大学WV時代から何度もザイルを組んだことがある気心のしれた友人である。前からこの夏どこかの本チャンルートに登ろうという話は出ていたものの、なかなか日程があわなかった。結局日数の都合ができなかったので夜行日帰りができて充実感のある所ということで一の倉に行くこととなった。ルートは前から気になっていた変形チムニーである。彼に言わせれば「一の倉は気分的に好きになれない。」ということなのだが、内容的には充分手応えがありそうだし話の種にでもということで無理やり（でもないが）ルートを決定した。今回は会の山行ではないので例の条例に従って登山届けを提出する少々面倒な作業があったが、場所が場所だけに出しておいたほうが安心だ。晩飯を筑波で食って出発した。

1時頃、一の倉沢出会いに到着。駐車場には一台も車がない。お盆を少しずらしただけでこのすきようだ。テントを張ってビールをくらう。誰もいないはずなのにテントの外では何となく人の気配がする。さすがといひかなんといひか、やっぱり一の倉である。

朝5時、やや低い雲が烏帽子岩を隠しているが天気の方は持ちそうだ。駐車場には何台か車がきていたが、みんな写真か見物のようで山の恰好をしている人はいなかつ

た。さほど早くもない出発で変形チムニーの取付きに着いたのは7時過ぎ。雪溪が消えたため、うっとうしい50m下降といやらしいテールリッジ基部の登りが登攀意欲をそぐ。先日から腹をこわして今日も非常に調子が悪い。天気でも悪くなればとっとと下ってしまうのになどと思いながら準備をした。中川は1年ぶりの本チャンということなのだが、一応核心部は自分がリードすることにしてつるべでいくことにする。今回は50mザイルをダブルで使っているおかげか、変形チムニーの下まで4ピッチを2ピッチで登ってしまう。こういうふうに一気にザイルを延ばせると、少々重くても50mで正解だななどと思う。最初の核心部である変形チムニーもバックアンドフットで快調に越える。股下にザイルがすばっと延びてなかなかの高度感である。トラバースの後で中央カンテに合流すると後はかつてたどったルートだ。次の核心部は気合のフリー（5級+）で突破して四畳半テラスでピレイ。（このピッチで残置フレンズを発見し、頑張って回収しようとしたが尻尾までもぐり込んでいて取れなかった。セカンドも頑張るが同じく取れず。）妙なところで時間を食い、12時50分に烏帽子岩の基部に立った。天気は終始高曇で暑くもなく寒くもなく、結果的に非常に快適な登攀であった。後は6ルンゼを懸垂下降し、テールリッジをもとどおりたどる。結局この日は誰も登攀しておらず、一の倉は貸切りであった。

出合 5:30 - 取付き 7:10 - 登攀開始 7:40 -
終了点 12:50 - 南稜テラス 15:00 - 出合 16:15



(中居 記)

奥秩父、丹波川本流での体験報告

92. 8. 23

パーティ L 本図一統、原田真由美

山登りを始めてかれこれ10年になる。どの山行もそれぞれの思い出が残り、のちにその思い出話をおしゃべりすることが楽しみの一つであった。なかには疲労感ばかりが強く残り、“あそこは疲れるだけだから、もう行きたくない”といった山もいくつかあるにはあるが、それでも頂上に立ったという満足感は十分に味わえる。しかし今回、また異なる意味で“もう足を踏み入れたくない。できればすっかり忘れたい”と思える山行を体験してしまった。

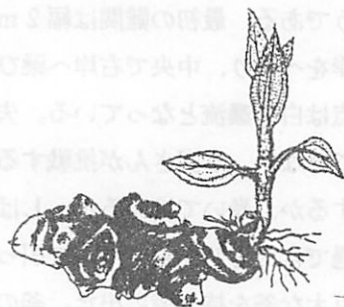
まだまだ厳しい暑さが残る8月23日。予定では佐藤君も行けるということで、3人での山行になるはずであったが、前夜、集合場所に行ってみると本図さん一人である。ちょっとカリカリした口調で「佐藤のやろう、久しぶりにあった友達と遊びに行くから山は止めるとよ。」と本図さんが言っている。今回は苦手な沢登りである。しかし、いつもお世話になっている本図さんが同行者なので、たった2人の山行でも私は安心である。夜中21時に下館を出発し、現地、泉水谷出合の三条新橋へ着いたのは1時頃であった。夜中というのにあたりは人・人・人。茨城の田舎から、都会の繁華街に入り込んだような気持ちにさせられる。夜が明けて、この人達がいつせいに入渓する様子を想像しながら、私達は仮眠に入った。

朝、雨が降り出しそうな曇り空である。肌寒く水に入るにはちょっと勇気がいる。それでも8時出発。川原をすぎると、犬戻り、坊主淵と続くが、腰から胸まで水につかりながら通過する。ゆうべいた人達はどこに行ったのだろう。確かに川原ではキャンプをしている人たちが大勢いたが、入渓している人は誰もいない。川原をすぎると、まるで私達2人の沢のようである。最初の難関は幅2m、長さ40mの手取淵と呼ばれるゴルジュである。左岸をへつり、中央で右岸へ跳び移るとガイドブックには書いてあったが、跳び移る地点は白い瀑流となっている。失敗すれば瀑流の中にドボンである。私には恐ろしくてできない。本図さんが挑戦するが、瀑流手前で引き返してきた。このゴルジュを挑戦するか、巻いて逃げるか、しばらく瀑流部をにらみつけながら考えるが、トップが通過できたとしてもザイルで引っ張れる場所ではないと判断し巻くことにした。その後巨大な釜を持つ滝に出た。釜の左の側壁に沿って泳いで

滝に取りつくが、大きく側壁がえぐられていて、青白く濁った水と共に岩の中に引き込まれそうである。最初に本図さんが行く。私は膝上まで水につかってビレーをしていた。天気が悪く寒い。身体中がガクガクと震える。私はなにげなく足元をながめてギョッとした。水にゆれているザイルに髪の毛がべったりからみつки、水の流れを描いているではないか。一瞬背筋に冷たい汗が流れる。すぐふたたび確かめた時には、髪の毛は一本もみられなかった。”なんだ、単なる錯覚か” 安堵と共にすぐ忘れる。滝は爆心の左を難なく登れた。ナメ床が続き再び泳ぎ。水勢強く、再々2人で交代しながら挑戦するが、どうしても押し戻されてしまう。あきらめて巻くことにし、最後の滝を登り、おいらん淵に出たところで終了した。終了時間14時。時々パラパラを雨が降ってきたが、すぐにあがってしまったので良かった、良かった。しかし寒くて痛かった。徒渉困難な激流部を頭から水に飛び込んでこえ、ばく進する滝をシャワークライムし、そして泳ぎ。終了してみれば、私の両膝はしっかり傷つけられ、出血していた。

今回の沢を遡行中、私はたんまりの砂金と思えるものを見つけた。あまりの寒さに私はちょっとした日だまりを見つけてしゃがみ込んでいたのだが、ちょうどその場所に波で寄せられた砂のたまりができていた。その砂がキラキラ金色に光っている。私は本図さんと呼び寄せ「砂金だ。砂金だ。」とはしゃいでいたのだが、「こんな所にあるわけなからう。」と言われ、後ろ髪引かれる思いでその場を離れたのだった。しかし青梅街道へ出た所で「やっぱりあれは砂金だった。」と本図さんが言い出した。そこには、おいらん淵の名前の由来が書いてあった。それを読んで私は再びゾツとした。すっかり忘れていた、ザイルにからみついた髪の毛を思い出したからだ。その後、集会で砂金のことが報告されたときに「取りに行こう。」との声が出されたが、私はまよわず「いやだ。」と言っていた。気持ち悪くて、この事実を人に話すことができずにいたが、この場を借りてここに報告することにする。

(原田 記)



北岳バットレス、ピラミッドフェース

92. 8. 25-26

パーティ L 小笠原進（札幌北峰岳朋会）、高木均

札幌からの電話で誘いを受け、北岳に行くことになった。北岳バットレスにはずっと前に一度行った記憶があった。山を始めてまめに記録をつけていた頃の古い山行ノートをひっくり返すと、ちょうど20年前の10月の記録があった。大学山岳部の先輩とふたりで、2日間だけバットレスに遊んだ記録である。ピラミッドフェースから四尾根を登り、マッチ箱のコルからアップザイレンしてDガリー奥壁へ、さらに最後に中央稜のダイレクトルートを継続して登っている。21才の若い盛りで、中央稜の上部では真っ暗となり、頂上を経由して八本壺から二股に降り着いたのは夜9時を過ぎていた。さすがに翌日は疲れてはてて、第二尾根を登ったにとどまっている。

今回はピラミッドフェースから四尾根だけである。「体力は落ちているが、登攀距離はあの時の半分だから大丈夫」とたかをくくったのが大きな間違いであった。

24日の夜つくばを発ち、25日未明に広河原に入る。駐車場でひと寝入りするつもりが8時過ぎまで眠ってしまった。9時30分釣り橋を渡って出発。今日は白根御池で相棒と落合うだけなので、一人のんびりと歩く。20分歩いて10分休むという超スローペースである。久しぶりの山で、おまけに好きなだけ休めるので非常に楽しい。時間もたっぷりあるので、遠回りになるが二股経由で行くことにして大樺沢コースを選ぶ。

よく踏まれた道を2時間ほど進むと、バットレスが徐々に近づき、雪溪の残った二股に着く。二股は今では幕営禁止となっているが、たしかあの辺りにツェルトを張ったはずだなどと昔を思い出しながら、岩小屋のある大岩の上で日向ぼっこをして憩う。二股からは山腹を巻く道をたどり、白根御池に20分ほどで着く。広河原からの尾根道は急なので、小屋のボッカさんは傾斜の緩い二股経由の道を使うそうである。

相棒はすでにテントを張って待っていた。8年ぶりの再会に話がはずむ。53才、通称O（オー）氏である。十二分にトレーニングをつんできたとのこと。北海道から内地の山に登りに来るのは、まさに大遠征である。明日は全部トップをまかして、十分楽しんでもらうことにする。しかし途中で右足をひねったそうで、ちょっと腫れている。本人は大丈夫と言っているが心配である。

26日、3時起床。4時過ぎから出発準備して明るくなるのを待つ。4時50分出発。Cガリー入り口で喉をうるおし、モルゲンロートに輝くバットレスを見上げながら、ガラガラのDガリーをつめる。空は雲一つない快晴。朝から暑くなってきた。下部岩壁取り付けに7時到着。十字クラックがよい目印だ。

7時30分、凹角から登攀開始。3級40m登るとハングに突き当たる。そこを左に踏み跡をたどり、Dガリーに入る手前でフェイスを15m登ると小ハングの下に出た。そこから2ピッチで大ハング下の中間バンドに出る。大樺沢の雪溪の上を沢山の登山者が登っているのが、はるか下に見える。カシオの気圧計付き腕時計で、高度の獲得状況がよくわかる。しかし、高気圧がはり出してきたためか表示がだんだんあやしくなってきた。頂上では結局100m以上も高度が狂っていたのだが、...

バンドを左へ、右へとジグザクにハングを避けて登るといよいよ核心部である。凹角からフェイスを人工で登り、ハング帯の弱点となっている部分をめざす。かぶり気味の凹角を人工で越え、クラックに沿って20m登るピッチがちょっと難しい。ここではクラックにハーケンが使えず、ナッツを3個使った。ナッツがこんなに有効だとは思わなかった。O氏は甥から借りてきたナッツ類をたくさんぶら下げ、まるでチンドン屋のようである。

その後は、速くはないが確実に登っていくO氏にリードされて、12時に四尾根取り付けのテラスに出て、下部岩壁の登攀を終了した。ここで昼食とする。O氏は、前回北岳に来たときは雨だったそうで、くっきりと見える富士山や鳳凰三山、八ヶ岳を眺めながら、「いやあ今回はついている」をしきりに連発している。

四尾根は楽勝と鼻歌混じりで登攀を開始した。四尾根はCガリー側を簡単に登る部分が多いが、O氏は「もう二度と来ることはないので、忠実に尾根伝いを登る」といってきかない。おかげでマッチ箱のホルは14時過ぎになってしまった。ここは中央稜に向かってすっぱりと切れ落ち、あまり居心地のよいところではない。しかし、反対のDガリー奥壁は赤紫のフェイスが続いて美しい。

さらに終了点まで2ピッチ、私はややバテ気味でゼイゼイと言いながら登る。易しい部分で体を持ち上げるのが特に辛い。16時20分登攀終了。ちょっと時間がかかり過ぎである。

O氏は依然快調であるが、私の調子は最悪となり、通常20分もあれば頂上に着くはずのところを40分もかかり、日が傾きかけた頂上にほうほうの態でたどりついた。ここからは下りと安心したのも束の間、けっこう登り下りがある。北岳山荘前で

北岳バットレス、ピラミッドフェース

92. 8. 25-26

パーティ L 小笠原進（札幌北峰岳朋会）、高木均

札幌からの電話で誘いを受け、北岳に行くことになった。北岳バットレスにはずっと前に一度行った記憶があった。山を始めてまめに記録をつけていた頃の古い山行ノートをひっくり返すと、ちょうど20年前の10月の記録があった。大学山岳部の先輩とふたりで、2日間だけバットレスに遊んだ記録である。ピラミッドフェースから四尾根を登り、マッチ箱のコルからアップザイレンしてDガリー奥壁へ、さらに最後に中央稜のダイレクトルートを継続して登っている。21才の若い盛りで、中央稜の上部では真っ暗となり、頂上を経由して八本壺から二股に降り着いたのは夜9時を過ぎていた。さすがに翌日は疲れてはてて、第二尾根を登ったにとどまっている。

今回はピラミッドフェースから四尾根だけである。「体力は落ちているが、登攀距離はあの時の半分だから大丈夫」とたかをくくったのが大きな間違いであった。

24日の夜つくばを発ち、25日未明に広河原に入る。駐車場でひと寝入りするつもりが8時過ぎまで眠ってしまった。9時30分釣り橋を渡って出発。今日は白根御池で相棒と落合うだけなので、一人のんびりと歩く。20分歩いて10分休むという超スローペースである。久しぶりの山で、おまけに好きなだけ休めるので非常に楽しい。時間もたっぷりあるので、遠回りになるが二股経由で行くことにして大樺沢コースを選ぶ。

よく踏まれた道を2時間ほど進むと、バットレスが徐々に近づき、雪溪の残った二股に着く。二股は今では幕営禁止となっているが、たしかあの辺りにツェルトを張ったはずなどと昔を思い出しながら、岩小屋のある大岩の上で日向ぼっこをして憩う。二股からは山腹を巻く道をたどり、白根御池に20分ほどで着く。広河原からの尾根道は急なので、小屋のボッカさんは傾斜の緩い二股経由の道を使うそうである。

相棒はすでにテントを張って待っていた。8年ぶりの再会に話がはずむ。53才、通称O（オー）氏である。十二分にトレーニングをつんできたとのこと。北海道から内地の山に登りに来るのは、まさに大遠征である。明日は全部トップをまかして、十分楽しんでもらうことにする。しかし途中で右足をひねったそうで、ちょっと腫れている。本人は大丈夫と言っているが心配である。

26日、3時起床。4時過ぎから出発準備して明るくなるのを待つ。4時50分出発。Cガリー入り口で喉をうるおし、モルゲンロートに輝くバットレスを見上げながら、ガラガラのDガリーをつめる。空は雲一つない快晴。朝から暑くなってきた。下部岩壁取り付けに7時到着。十字クラックがよい目印だ。

7時30分、凹角から登攀開始。3級40m登るとハングに突き当たる。そこを左に踏み跡をたどり、Dガリーに入る手前でフェイスを15m登ると小ハングの下に出た。そこから2ピッチで大ハング下の中間バンドに出る。大樺沢の雪溪の上を沢山の登山者が登っているのが、はるか下に見える。カシオの気圧計付き腕時計で、高度の獲得状況がよくわかる。しかし、高気圧がはり出してきたためか表示がだんだんあやしくなってきた。頂上では結局100m以上も高度が狂っていたのだが、...

バンドを左へ、右へとジグザクにハングを避けて登るといよいよ核心部である。凹角からフェイスを人工で登り、ハング帯の弱点となっている部分をめざす。かぶり気味の凹角を人工で越え、クラックに沿って20m登るピッチがちょっと難しい。ここではクラックにハーケンが使えず、ナッツを3個使った。ナッツがこんなに有効だとは思わなかった。O氏は甥から借りてきたナッツ類をたくさんぶら下げ、まるでチンドン屋のようである。

その後は、速くはないが確実に登っていくO氏にリードされて、12時に四尾根取り付けのテラスに出て、下部岩壁の登攀を終了した。ここで昼食とする。O氏は、前回北岳に来たときは雨だったそうで、くっきりと見える富士山や鳳凰三山、八ヶ岳を眺めながら、「いやあ今回はついている」をしきりに連発している。

四尾根は楽勝と鼻歌混じりで登攀を開始した。四尾根はCガリー側を簡単に登る部分が多いが、O氏は「もう二度と来ることはないので、忠実に尾根伝いを登る」といつてきかない。おかげでマッチ箱のホルは14時過ぎになってしまった。ここは中央稜に向かってすっぱりと切れ落ち、あまり居心地のよいところではない。しかし、反対のDガリー奥壁は赤紫のフェイスが続いて美しい。

さらに終了点まで2ピッチ、私はややバテ気味でゼイゼイと言いながら登る。易しい部分で体を持ち上げるのが特に辛い。16時20分登攀終了。ちょっと時間がかかり過ぎである。

O氏は依然快調であるが、私の調子は最悪となり、通常20分もあれば頂上に着くはずのところを40分もかかり、日が傾きかけた頂上にほうほうの態でたどりついた。ここからは下りと安心したのも束の間、けっこう登り下りがある。北岳山荘前で

夕暮れを眺めている多くの登山者の前は格好をつけて歩いたが、そこ以外ではまさに敗残兵の有り様で、10分歩いて5分休みとヨレヨレになって20時、白根御池のテントに帰り着いた。予定ではそのまま下山し、夜を徹してつくばまで帰り、翌朝出社するつもりだったが、とてもその元気はなく、テントに泊まる。

27日、4時半に出発して、6時過ぎに広河原に到着した。早朝だったが、高田さんに下山連絡を入れ、中央道のサービスエリアで会社に休暇の連絡をすると、やっと長い山行が終わったような気がした。

O氏はその後、後発パーティの50代の夫妻と合流し、さらに2日間バットレスを登って札幌へ帰ったところ、全治2カ月の靭帯損傷と診断され、3週間ギブスをはめて通勤したそうである。夫妻の方は、その後さらに光岳まで8日間の縦走を楽しんだそうである。戦時中生まれの猛烈さには、完全にまいりました。

(高木 記)



奥只見 片貝沢&貝のくら

92. 8. 28. ~ 30.

パーティ L 本図一統 原田真由美 うどのたいぼく

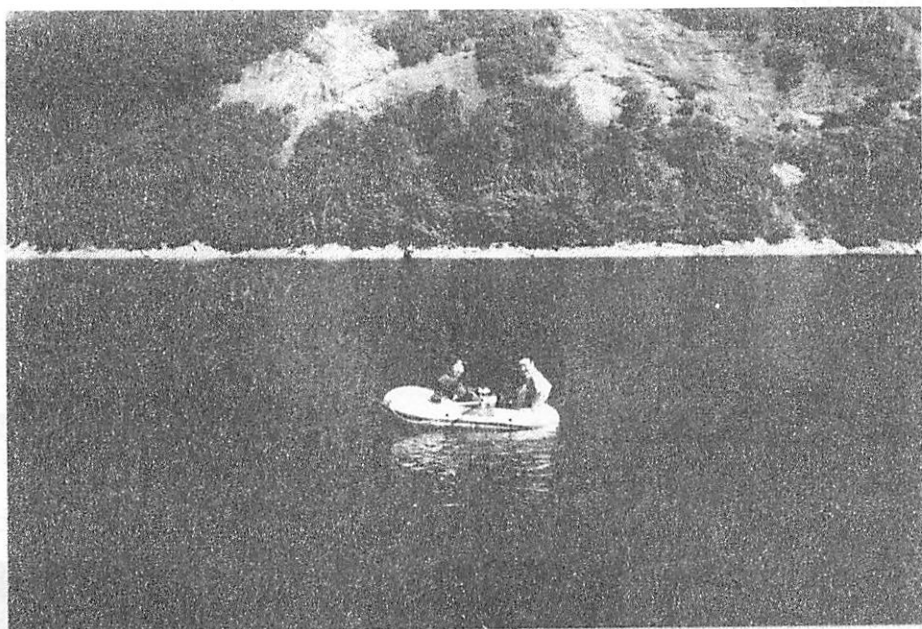
いつものように部屋でテレビを見ていると、電話がなつた。相手は本図さんだった。今度奥只見の片貝沢にイワナ釣に行くから参加しないかとのおさそいの内容だった。私は1日考えてから返事をする事にした。

沢登りとイワナ釣、スラブの登攀等楽しそうなことがたくさんありそうである。一昨年は新潟の川内山域に行き、泳ぎとイワナ、お酒をかなり飲んだ。この時は天気が悪くて完登することが出来なかったがそれなりに楽しい山行であった。

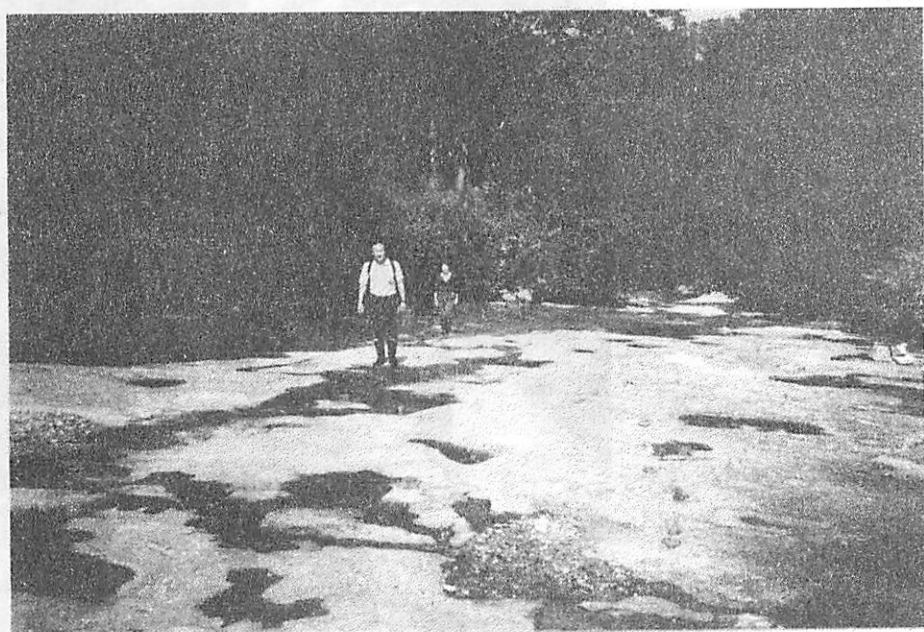
出発当日9時に下館に集合してみると、一人来ない人がいた。30分位待つてから電話をかけて見るがなかなか連絡が取れなくイライラするがどうにもならず10時が過ぎてしまった。結局本人が出発日を間違えたのだろうと言うことになり3人で下館をあとにした。前橋から関越を經由して小出を目指してひたすらアクセルを踏んで



貝のくらの登攀



片貝沢へのアプローチ用ゴムボート



片貝沢を行く

で、車を飛ばした。

28日朝予約してあったモータボートに乗り込み奥只見湖の周りを眺めながらボートは快適に走った。これからが登りである。今日の目的地である片貝の池まで大きなザックを背負って歩きだした。

池までは約1時間のアルバイトであるが、厳しいものがありました。踏み跡は、はっきりしており判り易かった。樹林帯の中にポツカリとした池が現れた。BCの場所を決めてから、早速貝のくらのスラブを目指して取り付けに向かった。取り付けについて見るとスラブの傾斜はゆるく、なんとか登れそうである。本図、原田、私のオーダーで登ることにした。

昔の記録を見ると3級程度と書いてあったが、少しもの足りない気がする。私の感じでは2級程度だと思う。5~6ピッチ、ザイルを伸ばして、登攀は終了した。

取り付け地点に戻り、冷してあったビール、そうめんを食べながらのんびりとしたひとときを過ごした。これで今日の予定は終わりである。後はBCに帰って寝るだけである。

29日今日は片貝沢でイワナを釣る日である。BCから湖までおいて本図さんが持参したゴムボートをふくらまし3人乗って片貝沢をめざして出発した。ボートに乗ってかいをこいでもなかなか進まない。ワイワイ言いながら30分で沢の入り口に着いた。なんと人がいた！ テント、カヌー、これを見たとき私はがっかりしてしまった。

沢に入って見ると水量も少ないイワナもあまりいそう



片貝沢に行く

も無い。しかしあきらめしないで竿をだしてみる。所々に釜、淵がありよさそうなポイントがあり釣った魚は6匹だった。今晚のメニューはイワナの刺身、イワナ汁とセビッチェだった。6匹の魚を料理して盛大なパーティーは終わってしまった。

今回の山行を振り返って見ると企画自体は素晴らしいものがあつたと思う。アプローチにボートを使うことなど私にはとても考え付かないものである。楽しい山行をするには工夫が必要であろう。

これから私も、おもしろいことができるように頭の中で試案中であります。

(うどのたいぼく 記)

大滝沢から姥湯へ

9 2 . 8 . 3 0

パーティ L 鈴木操、菊地光夫、笹沢ひろみ

今回の山行は奥羽線の峠駅より南側に滑川温泉を出発点とした大滝沢である。秋の紅葉が素晴らしく上流には姥湯温泉と言う秘湯もあり、出発点と終了点に天然温泉が有る私好みのルートが今日の沢登りです。全体はナメ滝が多くグレードも2級～3級と初心者向きで夏のシーズンは水量も少ない時期を選んだ。カメラ好きの私は3年連続で大滝(約100m)を紅葉の時期に来ているが、今ひとつ発光状態が良くなく自信作がマダ無い。

メンバーは笹沢、菊地、鈴木の3名で滑川温泉から500m程の下流から入渓する。水温は並で出合の近くではハイカー達で賑わっている。すぐ5m程の広い滝が表れ、左岸を登るが安全を期してザイルを取り出す。1年ぶりという菊地さんのルートファインディングは速く、終始トップでリードしてくれるのでラストの私は楽でアル。やがて水深20cmぐらいのナメ床(一枚岩)が延々と続き、左右は木々のトンネルが素晴らしく紅葉のシーズンにはオススメである。沢床は鉄分の多い水の為か茶褐色で流れも速く平坦である。

突然、目前に大滝がバーンと表れるが景観の素晴らしさに暫く見とれる。直登は不

可、右岸の急なガリーをツメてヤブに入るが急な木登りが15分ほどで滝の上部に出る。高度感は十分で流されると滝へスベリ台の様でアブナイ。すぐ小滝の連続とナメ沢が延々と続き我々をアキさせない。今の処は自然の造形美に笹沢さんは酔っている。ウワー、キャー、スッゴッイ、多種類の形容詞が沢の中でコダマする。1カ所チョット緊張する細かいルートで苦勞するが、細い木にシュリングを利用してビレーする。アキル程のナメが続いた頃、どうしても泳がねば取り付けない水量の多い滝が出現する。私の出番に成った・・・小型のザックをラストに任せ空身でドボン！中心部は水流で戻され右岸の岩に沿って再度のクロールが成功。シャワークライムで滝上へ高度はソレ程でも無いのだが、確保点が無く不安定のまま後続を迎える。笹沢さんはパワー不足でモドされるので無理に引っ張り上げる、菊地さんは前と後ろに2ケのリュックで浮力？を計る。

ヤレヤレ何とか悪場？を
終わり先が読めたので昼食
とする。この沢の水は飲用
向きで無く、水筒の水で
カップラーメンを作るが不
足分は少々だが飲んで見
る。マヂー！！何かの鉱毒
が含まれ魚もいないとの
事。一日中、天候は安定し
不安は無い、アキル程の小
滝とナメを味わい、ヌルイ
温泉が湧き出す場面にコレ
又、キャー！ハイキングの連
中とは違う原始的な天然の現
象が見られるのもアルパイン
クライミングの良い処
だ。??終了点は赤いペイン



滝を登る
菊地、笹沢

トの岩を目印に左側の小沢をツメるとすぐ登山道に出る。ヤッター、3人で握手。靴を下山用に換え今やハイカーの気分を下るが長雨の後か？3ヶ所程が崩れてマキ道が表れる。左下に今登ってきた大滝沢を見ながらの下山は気分が良い。

2時間程で滑川温泉の旅館へ到着するが車へ戻り、20分程上流の姥湯へ入浴目的で林道を飛ばす。一般の車も多く観光客で満員状態の露天風呂は大型で男女別の作りたて！！であった。これは私の誤算であり昨年までは混浴の秘湯だったのだ！！残念。周囲を大岩壁と緑に囲まれた露天風呂は、月夜や紅葉の時期が一番。私個人の趣味でもあり、登山の終了点に温泉のあるルートが段々と必要になってきた時代でもある。気の合った山仲間と共にテント内での談笑や食事、そして酒がはいっての人生論や下山後の露天風呂は、私の今後のライフワークに成るでしょう。今回は菊地さんのリードで楽しい大滝沢、沢登りと私のオススメ秘湯紹介。次回は何としても混浴！の

ルートを探し大勢の女性達を参加させるべく秘策を練っている処です。乞うご期待！！男性諸君は整理券を発行。鈴木まで。

(鈴木 記)



ナメ滝に行く



ギボウシの新芽

多摩川、水根沢

92. 9. 6

パーティ L 本図一統、生井一男、高田暢年、佐藤文則、古山正文

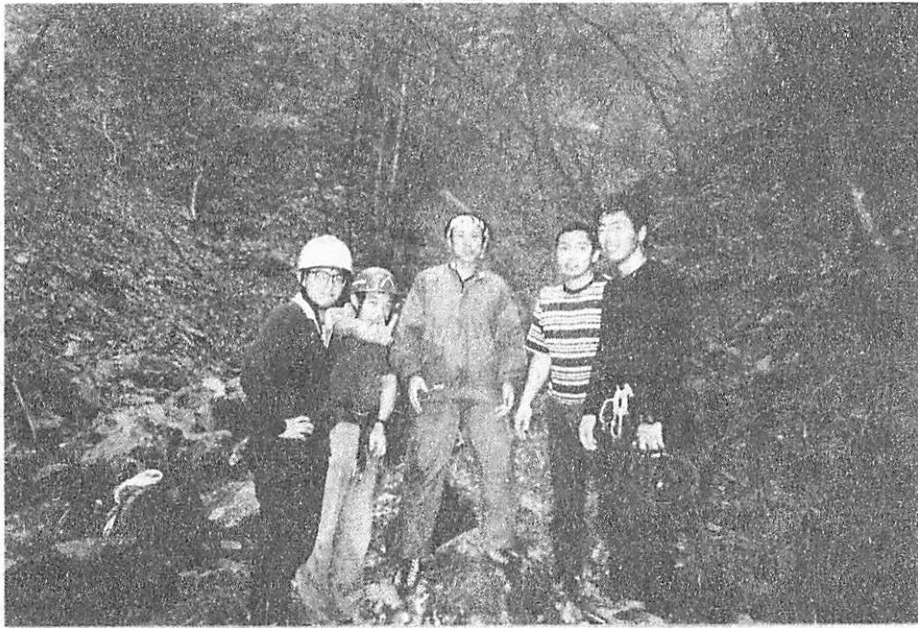
前夜、下妻午後9時集合。本図さんの車で、出発。途中、古河で生井さんを拾い、水根（キャンプ場）に向かう。午前1時半頃到着、ビールを飲んで就寝。

翌朝8時ぐらいに起きだし、朝食をすませた後、仕度して8時半頃出発。2、3日前までは残暑が厳しかったのに、今日は沢登りをするのには涼しすぎる。キャンプ場からすぐに沢に入り、いきなり泳いで滝に取り付く。この後、数回の泳ぎを交えて、資料にある半円の滝や、槌状の滝を越える。生井さん滝壺に飛び込むが……。11時半頃わさび田に着き終了。火を起し暖をとった後、林道を下り12時半頃キャンプ場に戻る。後は着替えして、車に乗り、途中新宿の石井スポーツを覗いて、9時頃下妻に戻り解散。

（古山 記）



続いて登ろう



遡行を終えて

佐藤、生井、本図、菊地、古山



平ヶ岳、大白沢 シロウ沢～ワカゴイ沢

92.9.13～15

パーティ L 本図一統、所 繁、原田真由美、古山正文、高田暢年

ここ数年は必ず1回は泊まりで沢に入る。勿論第一の目的は沢登り、第二の目的はイワナ、次に酒、焚き火と続く。しかし、2日や3日で抜けてしまうような沢だとそれだけ沢山の釣り師が入るため、イワナになかなかおめにかかれない。さて今回は？

9/12 下館21時発。砂子平0時30分着。駐車場にテントを張りビールを飲むが、いつもなら喉をゴクゴク鳴らしながらビールを飲む原田さんが前夜飲み過ぎだとかで殆ど飲まないではないか、珍しい事もあるものだ。その後テントの中で寝るが、古山氏はいつものように外で寝る。

9/13 天気曇り 朝はゆっくり9時に出る。沢の入口の籠渡しの場所を聞くために途中の民家で尋ねたところ、「イワナは居ないよ」といきなり出鼻をくじかれてしまった。確かにいたる所に釣り師がいて、イワナはいそうもなかった。最初沢に入るが水が冷たい。曇っているため涼しく余計に冷たく感じる。この変は巻き道があったので、暫くは巻き道をいく。その内、巻き道は無くなりゴルジュが幾つもでてくる、右や左をへつりながら進む、水は冷たいためとても泳ぐ気になれない。皆で曇った空を見上げながら「晴れねーかなあー」と呟く。

シロウ沢に入り順調にゴルジュを通過し途中焚き火をし、ソーメンを食べる。これも沢登りの良さである「うまい！」の一言に尽きる。この辺りよりぼちぼち本日のピバーク地を探し始めるがなかなかいい場所が見つからないまま進む内に「長さ80mのスッパと立った綺麗なゴルジュ」にでる。ルート図では核心部はこの先なのだが、後で振り返って見るとここが核心部であったとおもわれる。左岸から高巻くが足下が不安定でなかなか嫌らしい。残置シュリングを掴み空中に身を乗り出すような体制で滝の落ち口に下りるが、此处が一番緊張した。我々はまだザイルで引っ張られていると言う安心感から思い切った行動に出れるが、よくまあ本図さんはここをトップで行ったものだと感心してしまった。

なんとか無難に全員ここを越したのも束の間すぐ次にまたゴルジュが現れた。時間が気になる。此处を高巻いていると日が暮れてしまう。覚悟を決めここは泳ぎで突破することにする。まず本図さんがトップで行き2条10mの滝を登る。ザックピスト



うわ一股がさけちゃう

ンその後全員がザイルで引っ張られゴルジュを突破。全身びしょ濡れになり寒い。早く焚き火にあたりたいところだ。無情にもこの上にもいいビバーク地はなく、私が上流を偵察、本図さんが平ヶ岳沢に入り偵察。私の方はいいビバーク地を見つけられず戻ったところ本図さんが、平ヶ岳沢にビバーク地を見つけてきたのでそちらに移動する。そこは少し高台になっており増水しても心配のないところで、薪も沢山あった。すぐにツエルトを張り焚き火をする。(ビバーク地着16時50分)

焚き火にあたりながら濡れた体を外から温め、酒で体の中から温める。(ちなみに今回持ち込んだ酒は、ビール5リットル、日本酒1升、焼酎1升、ウイスキー500ml)。残念なことにイワナは無かったが、所さんの持ってきた玉葱とシーチキンと醤油とマヨネーズでオニオンサラダを作り、これをつまみに飲んだ。焚き火を囲み酒が進むにつれ話に花がさく。これも又沢登りならではの良さである。私と所さんはいつもの如くへべレケになり、原田さんも一人でツエルトに帰れず本図さんに連れて帰ってもらったらしいが、本図さんもかなり酔っぱらい足元がおぼつかないらしい。……、と翌日一人だけまともだった古山氏が言っていた。



ちょっと小休止
原田、古山、所、本図

9/14 天気はれ後曇り夜一時雨

朝、目が覚めると左足の膝が痛い。聞くと酔っぱらってこけたらしい（あまり記憶がない）。結局酒はウイスキー以外全部無くなっていた。（沢に入る前、車の所でパッキングの際、こんなに酒を持ち込んでも飲めるわけないから少し置いていこうか、と言っていたのが嘘のようである）

8時30分出発。シロウ沢に戻り滝をどんどん越していく。やがてワカゴイ沢に入り更に小滝が連続し結構ザイルを出し登る。そのうちルート図では核心部「見た目に比べてとても悪い」という2mCS~3m~3mのゴルジュが現れたが、それほどではなかった。「幾段にもわかれた100m滝」の少し手前でラーメンを食べる。朝天気は良かったのが又曇ってきて焚き火が温かい。100m5段の滝は下は簡単に抜けたが上の20mの所は完全な岩登りとなり、ザイルを出したりしたため結構時間がかかった。

その後も小滝を幾つか越え最後の滝を越えたのが16時頃、ピバーク地を探す沢も源頭近くなり傾斜がきつくなかなかいい場所がない。それでも少し傾斜のゆるやかな所を探しピバーク準備にかかる。わずかな薪を集め焚き火をするが昨日のような沢



100m大滝を登る

にはいかず、この日はコンロを使い飯を作った。そのうち小雨もふりだした。昨日の飲み疲れもありこの日は早々にツェルトの中に入り寝ることにする。場所が傾いているため体がズリ落ちる。体を上に持ち上げるがすぐにズリ落ちる。結局エビの様な体制で寝返りも打てず、なかなか眠れない。それでも少しウトウトしたが夜中結構強い雨の音で目が覚めた。「アレ！古山氏がいない」所さんに聞くと、外に出ていったまま帰ってこないと言う。元々彼は狭いテントの中で寝るのは嫌いならしく、前日も焚き火の脇で寝ていた。しかし今夜は雨が降っているというのに、焚き火の火も消えているだろうに大丈夫だろうか心配であった。

翌朝、とても寝ていられるような状態ではなく6時頃起き出した。所さんと2人で古山氏のことが心配で外に出て古山氏の名前を呼ぶと、熊笹の中からヒョイと顔をだし「おはようございます」との声が帰ってきた。「昨日眠れました？」と聞くと、「ツェルトの中よりは快適でしたよ」と言っていた。本図さんと原田さんに聞いてもやはり殆ど眠れなかったようだ。

9/15 天気曇り

8時45分出発。沢を少し詰めるとやがて水は無くなり、藪をかきわけどんどん登

るとついに平ヶ岳の頂上についた（9時30分）。睡眠不足でボーとしていた頭も、此処まで来ると後は一般道を下るだけだと思えばスッパリしてきた。途中ここの近くにある玉子石を見るため寄り道をしたが、後はひたすらタカノ巣尾根をくだった。台倉清水で冷やし中華を作りマユネーズをかけて食ったが、これがなかなかの美味だった（原田さんおすすめ）。鷹ノ巣部落着16時。私と所さんで車をとりに戻った。歩くと3〜40分かかるが途中通りがかりの車に乗せてもらいラッキーであった。

結果的にイワナは一匹も釣れなかった（釣りをする時間が無かった）が、沢自体は滝有り、ゴルジュ有り、泳ぎ有りと、とても遡行価値の高い沢であったと思う。これで天気がよく暑ければ言うこと無かったのだが、また来年に期待したいところである。

（高田 記）

巻機山、米子沢

92.9.14〜15

パーティ L 中居康展、庄司真陸

夏合宿の北岳の帰りで「今度、沢登りにいこう！」といってくれた中居サンは、誠実にも約束を破らなかつた。試験で忙しい中、時間を都合してくれた中居サンに感謝！

9/14PM5時、つくば出発。中居サンが、私の車の速度計と燃料計の指示が出ないのを気づいた。「回転数計が出ているから大丈夫ですよ。」といったが、「俺の車でくればよかった。」と心配不安顔だ。はやくも中居サンの信用を失ってしまった。

ちょっと道に迷ったが、登山口にPM10時着。さっさとテントをたて、寝る準備をする。このとき、油断してフライを張らないのが失敗だった。1時間も経たないうちに、見すかしたように雨に降られ、あわててテントを出す。結局車中泊。

翌朝、雨はあがったがドンヨリと雲はあつい。AM6時出発。こういう天気ではやや

気が重い。おまけに沢登りは史上初とあって、無事ここに戻ってこれるのか、不安も大きい。ワクワクする気持ちもあるが反面、上手くやれるか心配だ。とりつきの気分悪い砂防ダムを越えて進むが、それから水がなく河原歩きがつづく。「ずっとこのままじゃないだろうな。」と中居サンが不満げにつぶやくことから、やはりこの水量のなさは沢登りにしては異常なんだな、とわかる。が、その心配も30分程度で終わった。豊富な水量を持つ流れがあらわれたのだ。

はじめて経験する沢登りは激しくよかった。だが、当時は緊張のあまり楽しむ余裕がなかった。今行ってもたぶん同じだろうけど。中居サンは予想していた以上によかったらしく、狂喜乱舞して「イイだろ、イイだろ！」というので、私もニコっとしようとするが顔がひきつってしまう。途中、恐そうなところがあり、「ここ、ザイル必要な？」と中居サンが聞く。ちゅうちょせず「お願いします」と頼む。こんなところで、と中居サンが一瞬あきれ顔になるが「そうだね、不安なときはザイルを出したほうがいいね。」とニコやかに言ってくれたので助かった。結局無事通過。

滝が滑りそうなので、迂回してヤブ漕ぎしながらヌカるんだ急斜面を登る。水しぶきを浴びながら滝のはしを登る。胸まで水につかりながら淵を進む。実に変化に富み、その度に感動してしまう。沢登りの最大の魅力は、この次から次へと見事に景色、環境が変わる、その変化にあるのではないかな。

途中、中居サンに何回も待ってもらう。がんばってくいつこうとするが、いつの間にか差が開いてしまうのだ。くやしい、けどしかたないや、とマイペースで進む。

最後で最大の山場、大ナメも素晴らしかった。中居サンは中央突破をはかり、私もついていこうとするが滑りそうで怖く、あわてて端に逃げる。そして大ナメを過ぎると、最後は高層湿原への大変化をみせる。「ああ、沢登りは少し怖かったけど、おわっちゃったな。」スニーカーにはきかえ、1歩1歩かみしめながら稜線へ、頂上へ向かう。



(庄司 記)

中央壁『正面フェースルートの思い出』

92. 9. 23

パーティ L 本図一統、原田真由美、生井一男、高田暢年

何でだか知らないが、根っからのはぐれ雲の性格からか？集会に、久々行って、なんと中井と、凹状岩壁からコップの左岩壁の継続登攀をやろうと、契約を交わしてしまった。まあ以前に登りたいなと考えていたし、左岩壁には、青春の苦い思い出があった云々。（だから何だと言われても困るが～）

まあ前置きは、これ位で。その登攀をするには少しブランクがあるので、9月23日の正面フェース山行に混じって、まずは自分の登攀レベルの確認と勘を取り戻す為に参加した。

パーティ編成は、本図氏、高田氏、原田女史、生井の四人である。

幽ノ沢に入るのは余りないので（よく考えると数える程だと思う）、アプローチでの記憶が少ないな…まあ今まで山行回数が少ないのだから…仕方ないかと、考えながらカールボーデンを登って行く。

取り付きまでのアプローチで、もうザイルを付けていく。（安全第一）

たぶんここが取り付きにだろうと言う所に着いたのは、9時は過ぎていたと思う。まずは本図さんがトップで、その後を生井、原田、高田のオーダーでつながって行く。このオーダーになったのは、俺が山岳ビデオカメラマンなので、撮影するための配置なのである『エヘ～ン！』（今回の撮影は、オーダーの順番から言って原田さんが『正面壁のシーン』の撮影のヒロインになるだろうな…）

途中、被ってる所までは本図さんがトップだったが、ここからは俺がトップを交替していく。すると途端に、本図さんから『おめは、トットコ、トットコ登っていつちまうんだから慎重に行けよ。それに被ってる所は、ピンも、小まめに有るんだから、A0でいけよな。ビレーも、バンバンとってけよ。こまめに取っていいんだからな！

もう一メートル置きにとってけ云々』と一声がかけられ…ヌンチャクやらカナピナ、シュリング等をどっさり渡してくれた。

『まったく、うるさい子姑のようだな。もう全く。ちゃんと慎重にのぼるし、ビレーもこまめにとっていきますよ』と言葉をかわし登り始める。ホントにピンがたくさんあって、どれを使おうか迷うほどだ。だからA0の架け替えは、ピンにピナをか

け手を伸ばすと、ピンが有るような状態だった。何だかんだとトコトコいくとビレイポイントに着いた。そして本図さんを、ビレーする

上がって来た本図さんにビレイを交替してもらい、『良い絵』取れそうな予感した為に（カメラマンの習性なんだろうか？）、原田さんが出て来るであろう方向にカメラを向けた。……あれ？なかなか出て来ないぞ！てこずっているのかな？…。被写体が出て来ないので、カメラをパーンして本図さんに向けると気が付いたようで。

『ああ？！俺を撮ってんのか』と本図さん…。カメラのファインダー一杯に、彼の顔のアップが入る…

『なかなか無いでしょう。撮ってもらうなんて。いつも撮ってばかりで』と私。『ないですね、ええ、この歳になるまでねえ。もう35才になりますけどねえ』

…35、あれ？本図さん？…

『嘘〜つけ！嘘〜つけ』と叫んでしまった。二人でそんなことを話していると、原田さんのヘルメットが見えて来た。ようやく来たかと、カメラを構える…。しか〜し、見えたのだけれど、被っている所でペースが落ちたみたいだ。カメラのファインダーには、ホールドを探してるのか回りをキョロキョロ見回している彼女の姿が見える…。なにやら、例のごとく、独り言を『ブツブツ』言ってるようだ。『ザイルを、張ってるから一気にこいよ』と声をかける。ここのシーンは、原田女史の一人舞台となった。いつも良いポジションにいるなあと感じるのは、私だけだろうか…？

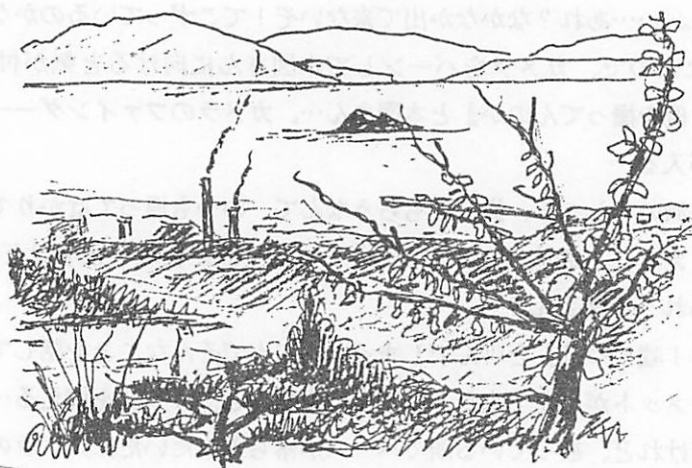
ここを過ぎれば、核心部は終わったようだから後の登りは楽だ。上部は、ブシュ帯で終了点に、着いたのは13時50分。四人で登ったにしては、4時間半なのは順調なペースだったと思う

後は中芝新道の下降だけだ…と感じていたら、今やすっかり整備されて、以前のように間違える事は無いくらい指導標も付けられていた。前に間違えたときは、途中から懸垂下降して降りたのだけど、降りる場所はそんなに変わらない所と感じた。マア間違えても無事に降りられればいい訳だからね、などと考えながら降りて行く

今回も無事に下山できたし、体を動かしたから楽しかったし何も言うことは無い。でも若いころ八代と、共に登っていた時の様な緊迫感と言うか、充実感と言うか？は薄れて来ている様な感じだな。（その分、俺がうまくなったのだろうか？それとも情熱と言う物が薄れて来たのか？元々そんな物無かったのかな？）

ともかく四人とも無事に帰途に着いた

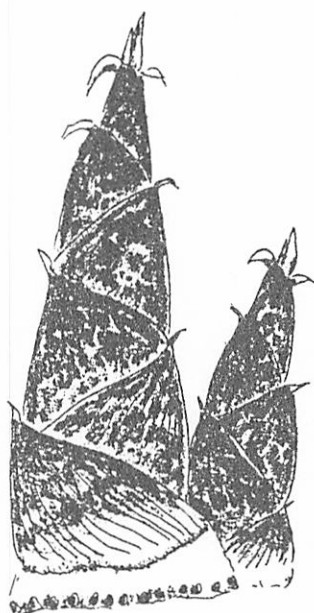
（生井 記）



※ 編集後記

6号は、だいぶ発行が遅れてしまった。なかなか原稿が集まらないのである。各自忙しいのはわかるが依頼があつてから遅くとも1カ月以内には提出してもらいたいものである。原稿は編集部之宝であります。みなさんよろしくね。

(音菜台州記)



季報「R&V」第6号 発行1992年 夏

発行者：鯉河仁志

発行所：ACC-J 茨城

〒315-01 茨城県新治郡八郷町柿岡1997

本図一統方

編集者：土度助兵衛 音菜台州記
